

『タンホイザー』を巡る3つの視点

今本幸平・細川裕史・溝井裕一

はじめに

「底辺の狭いピラミッドの頂点は低い」。より「深く」何かを追い求めようとしたとき、必要とされるのは、その対象に対する「広い」視野である。この理念を基に、2003年4月以来ドイツ文学専攻の院生は研究会を行ってきた。以下のマルジナリア3編はこの研究会活動の一環として、それぞれ文学、語学、文化を専修する研究会員によって執筆されたものである。共通の対象を異なる視点から考察することにより、研究対象をより立体的に浮かび上がらせようというのがその趣旨である。

今回研究対象として選んだのは、リヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner, 1813-1883) の代表作のひとつ、『タンホイザー』 („Tannhäuser“) である。この作品は、三幕からなるオペラで、1845年のドレスデン版と1861年のパリ版とがあり、内容が異なる。あらすじは、「快樂の女神ヴィーナスの元を去ったタンホイザーだが、歌合戦の最中に快樂を讃えてしまい、快樂にふけた生活を悔い改めるためにローマ巡礼を命じられる。しかしローマ法王はタンホイザーの懺悔を受け入れず、意気消沈したタンホイザーは再びヴィーナスを求めようとするが、彼を愛するエリーザベトの命をかけた祈りによって救済され、エリーザベトの亡骸の前で息絶える」というものである。

(細川記)